

【事例紹介】

地域住民と外国人留学生の相互学習による共生社会

-ギブ・アンド・テイクの精神で-

Local Community and International Students: Mutually Beneficial Learning
-Spirit of "Give and Take"-

国際大学 学生センター事務室長 信田 グレチェン

SHINODA Gretchen

(International University of Japan / Manager of the Office of Student Services)

キーワード：地域住民、まちづくり、Open Day、地域

1. はじめに

新潟県南魚沼市にキャンパスを構える我が国際大学（以下、IUJ）は、アジア圏でも稀にみるユニークな大学のひとつだ。

南魚沼産コシヒカリや日本酒で有名な八海山、八色スイカに雪国まいたけ、冬には最大3メートルの大雪が積もる日本列島の中央部に位置する本学は、50か国以上の国から集まった学生が生活を共にしながら学んでいる。学生は主にASEAN（東南アジアの10か国）、SAARC（南西アジアの8か国）、CIS（ロシアなどの旧独立国家共同体地域の14か国）やアフリカ大陸から集まり、日本人学生は1割ほどだ。学生たちは、この緑（冬は真っ白！）に囲まれたキャンパスで、学位取得に向けてすべての科目を英語で受講している。ここにしかない独自のグローバルコミュニティをつくりあげ、日々クラスディスカッションやグループワークを活発に繰り広げている。日本人にとっては、パスポートを持たずして、まさに「海外留学」が経験できてしまう。外国人留学生は日本の産業や高度発展を学びながら、日本の田舎生活も知ることができる。まさにすべての学生がこの地で「世界」を学ぶことができるのだ。

そして学生たちはこの地域にとっても重要な存在となりうる。多種多様な学生からの協力と地域住民からあたたかく受入れていただいているおかげで、この地域では驚くほどたくさんの国際交流の場

が設けられている。そしてこの交流のおかげで、学生たちには日本の田舎生活を、地域住民には国際的体験を提供することができる。学生たちはキャンパスを飛び出し、「世界」を地域住民に紹介したり、地域行事に参加し「日本」を感じたりする。また、地域住民をキャンパスに招待することもあるのだ。

2. IUJ と地域住民の関係性

IUJ の創立当初は学生のほとんどが日本人で、外国人留学生はほんの一握りだった。そのため、地域住民と交流する機会はほとんどなかった。最寄りの浦佐駅に上越新幹線が開通したことで東京—新潟間の往復がずっと快適になったにもかかわらず、この地域だけ取り残されたように遠く離れていたように感じられた。当時は2、3店舗ほどの飲食店と小さいスーパーがあるだけで、現在では地域とキャンパスを結ぶ大きな役割を果しているIUJ シャトルバスもなく、学生たちの交流はキャンパス内でのみ行われていた。そして、学生のなかには地域住民から好奇心で見られていると感じたものもいた。私自身（アメリカ出身）も同じような経験をしたことがある。IUJ に入学した1985年、外を歩くと地域住民にジロジロ見られたり、子どもたちが「Haro!」と面白おかしく叫んできたり、見ず知らずの人から突然髪の毛を触られたり、赤ちゃんが私の緑色の目を見て泣いてしまうこともあった。

しかし、これらはいずれ変わっていく。

IUJ は「Open Day」※と呼ばれる学園祭に地域住民を招待し始めたのだ。今日までその伝統は続き、年々規模は大きくなっている。（2020年度は惜しくもコロナウイルスの影響で開催以来初の中止を余儀なくされた。）毎年2000人以上の参加者が集まるイベントになり、参加者は15か国以上の世界各国の伝統料理や、見どころ満載の3時間のステージ発表を楽しむことができる。

※「Open Day」の詳細については後ほど紹介。

そうして外国人留学生たちのグループは徐々に町唯一のレストラン従業員や、医療関係者、教育関係者たちを交えて小さな英会話教室を開くようになった。参加者の数が増えるにつれ、地域住民との交流の輪は広がり、地域住民が学生たちを町のお祭りに招待したり、一緒にハイキングを楽しんだりし始めたのだ。また、学生たちは近隣の学校に出向き、地域の子どもたちに「世界」について知ってもらう機会を得るようになった。

3. まちづくり

南魚沼市はIUJへの理解が非常に高く、アットホームで協力的なコミュニティだ。特に教育関係者が率先して地域の子どもたちにグローバルな視点や興味を身につけてもらえるような活動を熱心に行っている。そして地域活動を行っている実業家や起業家、観光産業の関係者たちも、IUJの学生たちが

町おこしのきっかけになるかもしれない、と声をかけてくれるようになった。やがて地域住民も IUJ の外国人留学生たちに日本文化を知ってもらおう手助けをしたい、と声を上げはじめ、同時に彼らの国についても知りたいと思うようになったのだ。こういった関係が次第にできあがり、互いにプラスになるような以下の活動が行われ始めた。

・ ICLOVE (アイクラブ) <http://iclove.iuj.ac.jp/>

IUJ 教員監修のもと、ICLOVE は地域の事業活動のサポートを始めた。飲食店のメニューの翻訳から新しいマーケティング戦略の提案等、ICLOVE は地域の事業者たちと学生たちが連携して、南魚沼市の企業・事業所・創業者への支援・サービスを行うことを目的に活動している。ICLOVE が成長するにつれ、管理および運営は市役所に移され、ゲストスピーカーシリーズ、ビジネス向けの英語のディスカッションなどが参加者から好評を博している。

・ CAT - Community Action Team (キャット)

さまざまな地域のコミュニティ活動に参加してほしい、と常にオファーが絶えない学生のボランティア団体「CAT」を IUJ はとても誇りに思っている。CAT の主な活動は、市内にある 20 もの小学校に年に二度訪問し、地元の小学生たちと交流することだ。CAT に参加する IUJ の学生たちは、小学生たちが今まで見たことのない民族衣装やカラフルな衣装で登場し、それぞれ世界のお祭り、食べ物、動物についてプレゼンテーションを行い、子どもたちの世界への好奇心を刺激する。そうして IUJ の学生たちは子どもたちのロックスターになるのだ。

小学生たちも IUJ の学生たちに日本文化を紹介してくれる。日本の盆踊りや伝統的なお正月の遊びを披露してくれることが多い。なかには IUJ の学生たちを春には田植えに、秋には稲刈りに招待する小学校もある。そこでは驚くことに小学生たちが英語で米づくりのプロセスを IUJ の学生たちに紹介し、一緒におにぎりを作って楽しくいただくのだ。

子どもたちが 6 年生にあがるころには、15 か国以上の留学生たちとの貴重な交流を経験することになる。彼らは外国人をみても「Haro!」と叫ぶことも、怖がることもなくなり、多種多様な友だちができ、世界地図で彼らの国を見つけることができるようになるのだ。

・ 自己紹介とお国自慢

子どもたちだけでなく大人たちもまた、IUJ の学生たちと熱心に文化交流をしてくれる。それが高じて IUJ の学生たちは自己紹介とお国自慢のコーナーを市報に設けてもらうことになったのだ。このコーナーにはマダガスカルからモロッコ、バングラデシュからブータンまでと幅広い国が紹介されている。同様に、最寄りの駅構内には学生たちの自己紹介だけでなく、国旗、国獣、伝統料理などを大型

パネルにして展示してくれるようになった。パネルは日本語だけでなく簡単な英訳も記載されているため、誰でも楽しめるようになっている。また、地元のラジオ番組「FM ゆきぐに」では、学生たちが日本語で、母国について紹介する様子を聞くことができる。IUJ の学生たちは自分の国について紹介できる機会をたくさん設けてもらい、とても誇らしく感じているのだ。

・ UMEX - UONUMA Association for Multicultural Exchange (夢つくす) <http://www.umex.ne.jp/>

2001年12月、地域住民がIUJのスタッフと共にうおぬま国際交流協会（通称 UMEX）と呼ばれるボランティア団体を設立した。UMEX は多文化交流を促進し、地域の外国人住民をサポートし、外国の文化に対する日本人の意識を高めることが目的の団体だ。IUJ のキャンパス内にオフィスを構えるボランティアグループは、日本語の会話クラスから、子どもたちのホリデーイベント、桜の季節の着付け教室まで、さまざまなアクティビティを提供している。UMEX は地域住民と IUJ の学生たちをつなぐ重要なコミュニティグループなのだ。

・ ローカルビジネスの取り組み

IUJ は田舎にある小さなコミュニティだが、地域住民のグローバルな考え方は群を抜いている。地元のスーパーにはイスラム教の学生たちのためにハラール食品※が並ぶ。都会のどんなに大きなスーパーで探しても見つからないような珍しいスパイスやソース、米、油、スープ、そして子ども用のお菓子がこの小さな町で購入することができるのだ。

※ハラール食品：イスラム教（ムスリム）の戒律によって食べることが許された食べ物のこと。

4. 地域住民との交流、最大のイベント「Open Day」

IUJ は地域住民とのつながりを大切にしている。IUJ 創立当初からさまざまなプログラムやイベントが開催され、その中のいくつかは今日まで続いている。なかでも「Open Day（正式名インターナショナル・フェスティバル）」は、毎年恒例の IUJ 最大のイベントだ。当初の参加者数は数百人ほどだったが、今では最大 3,000 人をキャンパスに迎えている。

これから是非、みなさんにも Open Day を想像しながら疑似体験してもらいたい。

あなたは今車の中にいる。秋においしい南魚沼産コシヒカリを収穫した田んぼ道を通ると、前方には山頂にまだ雪が白く残る越後三山が高くそびえたっている。どこまでも広がる青空の下車を走らせると、農家の皆さんと自然によって育まれたオアシスに抱かれた、IUJ キャンパスに出くわす。近づいていくと、正面玄関に向かって美しい並木通りが伸び、本校舎につながっていく。

車を降りると、しなやかなモンゴルのモリンホール（馬頭琴）の音色、インドネシアのガムラン、

アフリカドラムやジャンベの迫力ある音など、異国の音に出くわす。イベントの中心に近づくと、両側に8つずつブースが並び、体育館までのアプローチがある。各ブースでは、1つの国または地域の色、デザイン、風景、写真などが紹介され、ブースごとに見比べることができる。ここではアフリカ大陸（おそらく10~12か国）からの学生たちは「One Africa」として参加する。彼らは母国では敵対関係にあるかもしれないが、IUJ キャンパスでは1つの家族となる。これはIUJの魔法とも言うべきものであろう。同様に、中央アジア地域の学生も「The Stans」という1つのグループとなり、中央アジア各国の文化がどれほど近く、かつそれぞれにユニークかを表している。タイの素敵な笑顔は入場者の心をつかむ。モンゴルの伝統的な民族衣装を、アフガニスタンのそれと比較すると、両国文化の違いが明確に示されることは、インドネシアの帽子とネパールの帽子がお国柄を表すのと同様である。かつて同じ国に属していたにもかかわらず、現在は長い国境によって分けられているミャンマーとインドの二国も、ここではどこことなくつながりを感じることができる。

これらの色とりどりのブースを目で堪能すると、さらなるお楽しみが来場者の目（鼻？）に留まる。各ブースには、学生の故郷を象徴する自家製の伝統料理が用意されている。「餃子」は、日本、モンゴル、中国、メキシコのブースでよく提供されるが、どれも特別でユニークだ。「カレー」に至っては、さらに多数のレパートリーがある。学生たちはそれぞれ自慢の郷土料理を小ぶりの器に入れて100円で提供している。これは来場者がブースからブースへと移動しながら、できるだけ多くの料理が楽しめるようにと工夫しているのだ。



<Open Day 2018 のフードブースの様子>

Open Day の疑似体験はここで終わりではない。メイン会場である体育館にまだ足を踏み入れていないのだから。

世界中の料理でおなかいっぱいになると体育館へと歩みを進める。そこでは各国の素晴らしい（そしておバカな）ステージパフォーマンスを楽しむことができる。学生たちは、冬学期のあいだステージでの7分間のために日なりハーサルに励んでいる。バイリンガルの司会者に紹介され、ベトナムの軽い音楽によって民族衣装のアオザイに身を包んだ素敵女性陣が登場し、ステージは一気に華やかになる。次に、目に飛び込んでくるのはボリウッドパフォーマンスを踊るインドの学生たちと彼らが身にまとうサリーの金属装飾のきらめきだ。そしてシンバルとドラムの激しい音から、サラマと呼ばれるタイのムエタイに伴うリズムカルな音楽が聞こえてくる。インドネシアの学生は、きれいに整列して足を蹴りあげたり、地面にひざまずいたり、床を叩いたりしながら、複雑な手の動きの振り付けで観客を圧倒する。器用なインドネシアの学生に続いて、次はほとんどアメリカのカウボーイのような格好をしたフィリピンの学生が、バンブー・ダンスを披露する。どの国の出し物も味があり驚きの連続だ。



〈 Open Day 2018 のステージパフォーマンスの様子〉

ステージの様子（動画） <https://www.youtube.com/c/TubeIUJ/videos>

ここまできると「あれ？あの学生さっきも見たかも。」と思うかもしれない。多くの学生が国境を越えて他国の伝統的なダンスと一緒に披露する。彼らにとってこの異文化体験は楽しいだけではない。出身学生が少ない一部の国や地域のために“IUJ ファミリー”が助っ人として彼らのステージを盛り上げるのだ。

この時間になると、外のフードブースは完売し、次々と閉店していく。外に出ていた学生や来場者たちも全員体育館に集まり始める。3 時間にも及ぶステージパフォーマンスも終盤に近づく頃、日本人学生は何をしているんだと訝る方もいるであろう。でもご安心を。日本人学生チームは毎年、トリを務めるという大役を担っているのである。「よさこい」で伝統的な踊りを披露するところから始まり、女子高生の制服を着た男性たちが AKB48 を踊ったり、黒いサングラスをかけたイケメン風 EXILE メン

バーがクールに踊り歌ったかと思うと、ステージのあちこちで人間版ドラえもんが見え隠れしたりして、観客たちの笑いを誘うのだ。

そしてフィナーレを飾るのはIUJの学生たちと来場者が一つになって、各国の国旗を掲げながら希望を込めて歌われる”We Are the World”、“Heal the World”そして”It’s a Small World”だ。例年のことなのに、会場のあちこちで目を潤ませる人たちがいる。もちろん私もその一人だ。

「Open Day」の準備は大変で、学生たちが嫌う検便は避けて通れないプロセスだが、毎年それだけの価値がある。スタッフ、教職員、学生たちは、いつもとは異なる光の中でお互いを見ることができ、お互いに隠れた才能を見出し、尊敬と理解が深まる大切なイベントとなる。

2021年のOpen Dayに是非足を運んでほしい。

みなさんもIUJの魔法にかかってみてはいかがだろうか？